

新産地報告

## 岡山県に初記録のマルバカモメヅル (キョウチクトウ科)

岡山県自然保護センター 地職 恵

New distribution record on *Vincetoxicum glabrum* (Nakai) Kitag. f. *rotundifolium* (Honda) Sugim. ex Yonek. (Apocynaceae-Asclepiadoideae) in Okayama Prefecture

Megumi CHISHIKI, Okayama Prefectural Nature Conservation Center

キーワード：マルバカモメヅル，岡山県，新産地，分布東限.

### はじめに

筆者は，岡山県初記録と思われるマルバカモメヅル *Vincetoxicum glabrum* (Nakai) Kitag. f. *rotundifolium* (Honda) Sugim. ex Yonek. を県内で見つけたので以下に報告する。

マルバカモメヅルは，ガガイモ科カモメヅル属のつる性の多年草で，広島県と九州にまれに生育する(村田，1981)。

岡山県野生生物目録2009(岡山県編，2009)には，岡山県に生育するカモメヅル属の植物としてフナバラソウ，タチカモメヅル，ツクシガシワ，スズサイコの4種があげられているが，マルバカモメヅルは記載されていない。

ガガイモ科はAPG分類体系ではキョウチクトウ科と統合され，カモメヅル属(*Vincetoxicum*)はイケマ属(*Cynanchum*)とは独立した属として扱われている。マルバカモメヅルの学名は *Cynanchum nipponicum* Matsumura var. *rotundifolium* (Honda) Murata から *Vincetoxicum glabrum* (Nakai) Kitag. f. *rotundifolium* (Honda) Sugim. ex Yonek. に変更された。岡山県野生生物目録(2009)では，ガガイモ科として記載されているが，本報告では

APG分類体系に従いキョウチクトウ科として扱った。

マルバカモメヅルは，本州では広島県のみに生育するとされている(村田，1981)が，広島県植物誌(1997)には「タチカモメヅルの変種としてマルバカモメヅルが報告されている」という一文のみで，詳しい情報は書かれていなかった。

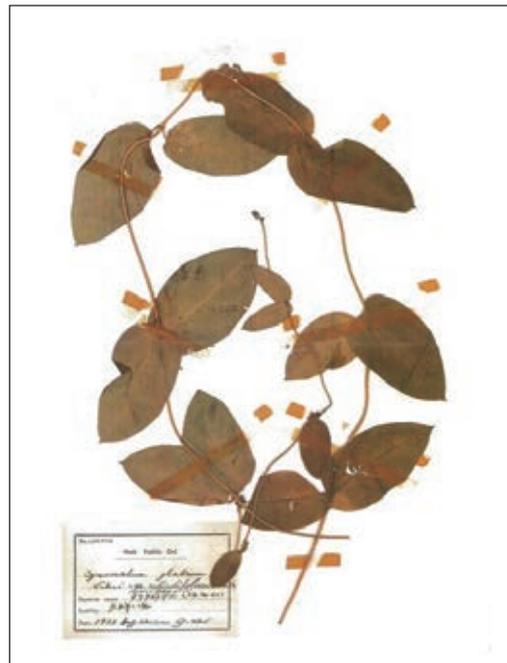


図1. 広島大学植物標本庫(HIRO)に収蔵された土井美夫氏採集の標本.

連絡先：fvbs5493@mb.infoweb.ne.jp

そこで、広島県植物誌(1997)の編集に携わられた広島大学名誉教授の関太郎博士に、広島県の生育情報をお尋ねしたところ、以下のご返事をいただいた。貴重な情報が含まれているので転記する。

『原記載は本田正次博士がTHE BOTANICAL MAGAZINE (1936) に発表されたものである。タイプロカリティーのMenda, prov. Higoは、現在の熊本県球磨郡あさぎり町免田ではないかと思われる。採集者は人吉市や市房山の植物を熱心に調査された、前原勘次郎氏の採集品によるものである。また広島県の記録については、広島県植物目録(土井美夫, 1983) に三滝山の記録があり、広島市西区三滝町のことを指すと思われる。土井先生の標本は先生が亡くなられた後に、宮島大学宮島自然植物実験所に寄贈され、調べた結果、広島大学植物標本庫(HIRO)に標本が残されていた(図1)。その標本にはタチカモメヅル(小泉no.40)と記入されており、マルバカモメヅルという同定を小泉教授が後にしたものか、土井先生自身によるものかは、はっきりしない。この標本は京大の標本庫に残されていたと思われ、村田(1981)の記載は、これに基づくものと考えられる。また、村田先生が書かれている「茎は基部からつる状となって長く伸び」という習性は原記載には書かれてなく、今後研究の必要があります』

広島県植物誌補遺(2010)には、村田(1981)、土井(1983)には記録のない、豊栄町と三次市の記録がある。またWeb検索からは「広島県東部にごくわずか見られる」と写真を掲載している個人サイトが2件あった。

九州での情報は、レッドデータブックおおいた2011(大分県編, 2011)で情報不足とされている。「生育環境は、低山地の湿地及び周辺地。現状は『九州火山群』で採集された標本はあるが、その生育地は把握されていない」とされ、熊本県も分布域として記載されているが、熊本県内の生育情報は、探すことができなかった。

以上のことから、マルバカモメヅルは、採られた古い標本や記録から、広島県と九州に分布するとみなせるが、生育するとされた地域においても、現状不明の場合が多いようである。

## 観察結果

### 1. 生育地

マルバカモメヅルは2015年6月16日に、真庭市蒜山の山間部に広がる標高508mの、耕作放棄地内で見つかった。もとは湿地であったらしく、開墾された後放棄され、草が繁茂するままの中に、見慣れないつる植物が草に絡んでいた。その植物は葉腋にたくさんの蕾と、淡黄緑色の花を一つだけ付けていた(図2, 3)。同行していた兵庫県植物誌研究会代表の小林禧樹氏に声を掛け、見ていただいたが、二人とも今まで見たことのない植物で、現地では「カモメヅルの仲間らしい」としかわからなかった。写真撮影と標本採集を行い、さらに観察を続けたところ、新たに3か所でカモメヅル属を確認した。まだ堅い蕾のものや、蕾を



図2. 草に絡まり一つだけ開花したマルバカモメヅルの株(2015年6月16日)。



図3. 淡黄緑色の花が一つだけ開花していた(2015年6月16日)。



図4. 花をつけていなかったカモメヅル属植物の株 (2015年6月16日).

つけていないものもあったが、葉や茎の形状は花をつけた株とよく似ていた(図4)。

翌日小林氏から「不明のカモメヅル属の写真を送った徳島大学の山城先生から、マルバカモメヅルという珍しい種であるとの回答をもらった」と連絡をいただいた。また標本を詳細に調べた結果も、本種に違いないであろうと確信した。分類学的根拠とした、形態の特徴については後述する。

発見時の6月16日には硬い蕾だったので、開花している頃を見計らって、7月8日に生育株数の確認と写真撮影のため、再度現地に赴いた。

周囲の草丈は前回よりもさらに伸び、探すには困難を極めた。前回生育していたはずの場所には、イノシシの堀あとがあり、あちこちで草の塊が大きくひっくり返されていた。あたり一帯を隈なく何度も探したが、4か所確認していたカモメヅル属植物は1株も見つけられなかった。

一年後の2016年7月19日に、再度自生地に赴き、記憶を頼りに背丈ほどある草の中を探したところ、生育の良い2株のマルバカモメヅルの開花株を見つけた(図5, 6)。前回よりも旺盛な生育をしており、他の場所にもないかと期待したが、それ以外には見つけれず、結局1か所の2株を確認したのみであった。



図5. 2株が絡み合って生育するマルバカモメヅル (2016年7月19日).



図6. 他物に絡んで立ち上がるマルバカモメヅル (2016年7月19日).

生育地の状況は、一面にセイタカアワダチソウ、ヤマアワ、ヨシ、アブラガヤ、アレチマツヨイグサなどが繁茂して(図7)、その下にはヒメナミキ、ヌマトラノオ、ヒメシロネ、チダケサシ、クサレダマ、ママコノシリヌグイなど湿地性の植物が花をつけていた(図8)。マルバカモメヅルの基本種タチカモメヅルも2株開花しているのを見つけた(図9, 10)。

大分県編(2011)や、Web検索から得られた広島県東部の生育地の情報でも、マルバカモメヅルは丘陵地の湿地に生育するとされる。本報告の



図7. ヤマアワやヨシが繁茂する生育地のようす (2016年7月19日).



図10. タチカモメヅルの葉と暗紫色の花 (2016年7月19日).



図8. 湿地性のヒメナミキの群生もみられた (2016年7月19日).



図9. 草に絡まるタチカモメヅルの開花株 (2016年7月19日).

生育地も高原の湿地であり、両者の生育環境は似通っていると思われた。

## 2. 形態

既存の図鑑等には本種の形態についての詳しい記述は少ない。そこで、同じ生育地内で見つかった基本種のタチカモメヅルとも比較しながら、マルバカモメヅルの特徴を記録した。

村田 (1981) の記載によると、マルバカモメヅルは「茎は基部からつる状になる」、タチカモメヅルは「茎が下部から直立して、先はややつる状となる」とされ、両種の相違がそこにあるように読み取れる。しかし観察した限りでは、どちらも地際では立ち上がり、その後つる状に伸びて他物に絡むことから、両者の基部の形態の差は認められなかった (図11)。

今回採集したマルバカモメヅルは、170cmを超す長さがあった。茎の表面には曲がった白毛が生え (図12)、対生に付く葉は、タチカモメヅルよりも明らかに幅が広く皮質で大きい (図13)。基部に近い葉を計測すると、長さ12cm、幅7.5cm、卵状長楕円形で、上部に出るものほど葉の大きさは小さくなる (図14)。葉の基部は心形からやや心形、葉先は急に細くなって先端は短くとがる。表面はやや艶を帯び、葉縁には曲がった短毛が生えて、縁がやや内巻く傾向がある。葉柄は5~8mmで曲がった短毛が生え、表・裏とも脈上に短毛が散生する。

タチカモメヅルの茎は100cm程度、曲がった毛は少ない。葉はやや厚く、長さ3-11cm、幅1-4



図11. マルバカモメヅルの地際の茎 (2016年7月19日).

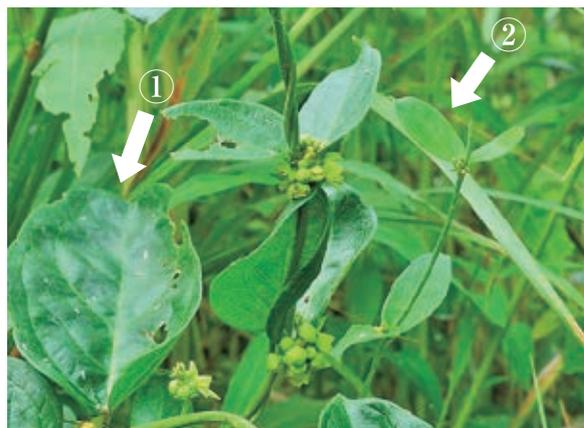


図14. ①は下部の葉, ②は先端の葉 (2016年7月19日).



図12. 茎の表面には曲がった白毛が生える (2016年7月19日).



図15. 花冠は淡黄緑色, 葉腋に10個ほどが群れてつく (2016年7月19日).



図13. 基部に付く対生の葉は, 卵状楕円形で幅が広く, 皮質 (2016年7月19日).

cm, 長楕円状披針形で先がとがる。基部は円形または多少心形となり, 葉柄は2-5mmで, 裏面脈上には短毛がある。

両種ともに花期は6月下旬~9月上旬と思わ

れ, 調査時における開花状況もほぼ同じであった。花は先端が5つに分かれた花冠と, 中心部の雌しべを取り囲んだ副花冠があり, 上部の葉腋に10個ほどが塊になって付く。マルバカモメヅルの花冠は径1cm内外で淡黄緑色 (図15), タチカモメヅルの花冠は径9mm内外で暗紫色である (図10)。原記載 (Masaji Honda, 1936) や村田 (1981) には, マルバカモメヅルの花冠の色にはふれられていない。

以上のような形態的特徴から, 本種をマルバカモメヅルと同定した。

使用した標本は, 岡山県自然保護センターの標本庫に収蔵されている。

### 考 察

マルバカモメヅルは生い茂る草の中に生育する植物で, 花の色も目立たない。しかも, 花期

が真夏であることや、湿地に生育することなどから、夏期に草深い湿地の繁みに入ることとはごく限られ、本種の確認事例が少ない要因の一つであると考えられる。

岡山県におけるマルバカモメヅルの生育地は、開墾して畑として利用されていた場所であることから、現在繁茂している草本類は、放棄された畑に周囲から種子が侵入して芽生えたものと考えられる。このことから、種子のソースとなった周辺地域にも、マルバカモメヅルが生育している可能性があるように思える。

岡山県野生生物目録(2009)に掲載されているカモメヅル属は、フナバラソウ、タチカモメヅル、ツクシガシワ、スズサイコの4種がある。タチカモメヅルを除く3種が岡山県のレッドデータ種とされており(岡山県編, 2010), その個体数は近年減少している。本種は、国内の生育地が本州と九州の狭い地域に点在していること、しかも古い確認記録が多く、現在の生育状況が不明なところもある。今回の調査結果より、岡山県がマルバカモメヅルの分布の東限地であることが明らかになり、当地域はマルバカモメヅルの貴重な生育地として、今後も注意深く見守っていく必要があると考える。

## 謝 辞

本報告をまとめるにあたり、広島大学名誉教授の関太郎博士には、文献や多くのご教示をいただいた。広島大学理学部付属宮島自然植物実験所の坪田博美准教授には、文献情報や標本(HIRO)

閲覧でお世話になった。兵庫県植物誌研究会代表の小林禎樹氏と徳島大学の山城考准教授には本稿を読んでいただき、貴重なご意見をいただいた。記して深く感謝いたします。

## 引用文献

- 土井美夫, 1983. 広島県植物目録, 148pp. 博新館, 広島.
- 広島大学理学部付属宮島自然植物実験所編, 1997. 広島県植物誌, pp.339-340. 中国新聞社, 広島.
- Masaji Honda, 1936. Nuntia ad Floram Japoniae. XXVI. THE BOTANICAL MAGAZINE 50 (595) : 389-392.
- 村田 源, 1981. ガガイモ科. (佐竹義輔・大井次三郎・北村四郎・亘理俊治・富成忠夫 編), 日本の野生植物草本編Ⅲ, pp.39-45. 平凡社, 東京.
- 大分県編, 2011. レッドデータブックおおいた 2011 大分県の絶滅のおそれのある野生生物, <http://www.pref.oita.jp/10550/reddata2011/02/ss518.html> (2016年12月12日)
- 岡山県編, 2010. 岡山県版レッドデータブック 2009 絶滅のおそれのある野生生物-植物編-, 354pp. 岡山県生活環境部自然環境課, 岡山.
- 岡山県編, 2009. 岡山県野生生物目録2009, 378pp. 岡山県生活環境部自然環境課, 岡山.
- 世羅徹哉・坪田博美・松井健一・浜田展也・吉野由紀夫, 2010. 広島県植物誌補遺, 広島市植物公園紀要 (28) : 1-74.